【香川県人権擁護委員連合会長賞】

「耳のそれ、何？」

高松市立香東中学校　一年　山下　翔

僕と会話をする友だちはそう聞きにきます。

僕は生まれたときから耳の聞こえが人のそれよりも程度が低く、幼稚園に入った頃から補聴器をつけています。補聴器をつけると今まで聞こえにくかった音や人の会話がよく聞こえるようになりました。朝起きたらすぐに耳に装着します。僕にとって、服やズボンと同じように当たり前に身に付けておきたい普通のものになっています。

この補聴器はとても大切に扱わないといけません。小さい本体の中にとても精密な機械が入っていて、強い衝撃から守らないと壊れてしまいます。だから、激しいスポーツや遊びをすることを控えなくてはいけません。また、水に濡れてはいけません。そのため、雨が降っている時や水がかかるような場所では注意が必要です。さらに、手入れも大変です。一日中耳に入れているので定期的に掃除をしたり、補聴器のお店に行って機械の調整をしたりしなければいけません。電池の交換も二週間に一度必要です。

このように、補聴器をつけていると様々な手間がかかったり注意を払ったりする必要がありますが、例えば、視力が悪い人がめがねやコンタクトレンズを使用していて手入れや管理をしなければいけないことと同じだと思っています。自分の体のことで困っていることがあれば、補聴器やめがねのような機器に頼ることで解消すればいいと思います。

「耳のそれ、何？」という言葉は、めがねをかけている人に「目のそれ、何？」と聞くことと同じだと思いますが、あまりそういう言葉をかける人はいません。きっとめがねの方が補聴器よりも身近で、どういう役割があるものか多くの人が知っているからだと思います。小

学校に入学してから多くの友だちに聞かれ、始めは丁寧に説明していましたが、クラス替えをするたびに新しい友だちが聞いてくるので説明が面倒になることもありました。しかし、不思議に思ったり知らないことを知りたくなったりすることは仕方がないことだと思って答えていました。それでも中学校に入学した頃には、同じ小学校の人たちはみんな僕の耳に障がいがあり補聴器をつけていることを知っていましたし、別の小学校から入学してきた人も僕の補聴器を見て質問してくる人はいませんでした。僕の補聴器は周りのみんなにとっても普通になっているのだろうと思うようになりました。

人間は、自分の普通と思っている価値観と異なった物や考え方、容姿を受け入れるのに時間がかかったり受け入れることができなかったりします。難聴という障がいも人によって聞こえの程度が違います。単純に聞こえる音の大きさも違うし、聞こえる周波数の領域も違います。そのため難聴の友だちはそれぞれが自分に合った補聴器をつけています。聞こえは自分の主観的な感覚なので、決して他人の聞こえを理解することはできません。それでも難聴の友だちと関わる時間が長くなるにつれて、相手が聞きやすい声の大きさや話しかける向きを意識して関わるようになりました。

大切なのは、相手がどう感じているのか、何を困っているのか、求めていることは何なのかなど、想像をふくらませて人と関わろうとする態度だと思います。障がいのあるなしではなく、誰に対しても同じだと思います。

僕の身の周りには相手の気持ちを考えて関わってくれる人が多くいます。だから僕は補聴器をつけていることを恥ずかしく思ったことはありませんし、隠そうと思ったこともありません。補聴器の色を決める時も、目立たないような黒やベージュではなく、自分の好きなブルーにしたほどです。

僕は自分の耳に障がいがあることは仕方がないと思っていて、それは納得しているのか受け入れているのか分かりませんが、今言えるのは幸せな生活を送れているということです。支援学級の友だちとも仲良くなれたし、同じ障がいのある友だちとも出会うことができました。その出会いによって、いろんな感じ方をする人がいるということを想像しながら人と関わることが大切だと気付きました。

人権は誰もが幸せに生きる権利で、幸せに生きるためには人との関わりが大切です。誰かの関わりによって幸せを感じることができます。僕は幼稚園の頃から中学生になった現在まで、補聴器のことでからかわれたりいじめられたと感じたりしたことは一度もありません。これは、多くの優しい友だちや先生方に支えられてきたからだと思っています。

僕はこれからも自分の障がいとともに生きていかなければいけません。でも、それは僕にとっては普通で、僕らしく生きていければいいなと思います。その人生の中で少しでも多くの人と当たり前にお互いのことを考えながら幸せを共有していきたいです。